平成30年度　政務活動費　先進都市調査報告書

会派名	市政協同
議員名	我妻静夫・古澤孝市・岡田健一・金濱元一・早川昇三・南川達彦・鈴木和彦・黒光ひさ
調査実施年月日	平成30年7月30日
調査先　自治体名等	青森県八戸市
調査項目	八戸ポータブルミュージアムについて
調査目的	八戸ポータブルミュージアムについて建設の経緯と効果について
報告内容 実施したこと	八戸市は、人口約 23 万 3 千人で、青森県内第二の都市で、雪が少なく日照時間が長い利点があり、東北新幹線で、東京まで最速2時間50分、三沢（八戸）空港から東京まで1時間20分、苫小牧とのフェリーは一日 4 便あり、八戸城を中心に形成された城下町で歴史と文化の息づく街として、古くから活況を呈する街並みが発達してきたが、近年中心市街地の空洞化や商業機能の低下が懸念されてきました。特に日曜日の中心市街地の歩行者通行量が、20 年間で3分の 1 に落ち込んできたことから市民アンケート結果でも同じ認識が確認され、中心市街地を八戸の「顔」にふさわしい、人々が集い、にぎわいのあふれる空間に再生するために、（仮称）八戸市中心市街地地域観光交流施設として整備を始めた。 事業のコンセプトは、「地域の資源を大事に想いながら新しい魅力を作り出すところ」としていて、八戸の人、物、食、文化などの財産が沢山あり、それらを地域の誇りとしてあらためて見つめなおし、時には、新しいものを取り入れながら、育み、新たな魅力を作り出し活性化することで、市民の地域へのさらなる誇りにつなげるとしている。 施設運営は市から館長はじめ 24 名と業務委託・テナント・市民参加で運営している。収支状況は（平成 28 年度決算ベース）で歳入は 2622 万 9 千円、歳出は 2 億8512万3千円で、一般財源から2億4094万4千円を拠出している。しかし中心市街地及び市全体の活性化を目的とする施設であることから、市民や市外からの来館者が利用しやすい環境づくり、新たな興味関心を喚起して中心街に足を運びたくなるような事業の実施を第一義に考えその実現に努めていると述べています。そして、その成功を踏まえて、第 2 期中心市街地活性化基本計画を平成 25 年度からスタートし、スケート場や子育てを頑張るママのサードプレイスとしての公園「マチニワ」を、さらには公営の本屋「八戸ブックセンター」も建設し、まちに賑わいをもたらしている。 【建設から今日までの経緯と実績】 ○平成17年5月　山車会館及び地域観光交流施設整備を提案。 ○平成18年1月　「中心市街地の中核施設として、市民交流、観光 PR 各種イベント開催に対応できる複合的な施設として検討を進める」ことを表明。 ○平成19年3月　プロポーザル方式にて基本設計を決定。平成 21 年 4 月起工し、平成 22 年 11 月末に竣工しました。

	○平成23年2月11日開館。 ※その1月後に東日本大震災が起きたが、免震構造により被害がなく避難所として機能する。 ○平成24年2月　一周年で来館者が 888,888 人達成。 ○平成25年5月　来館者 200 万人達成。 ○平成28年12月　総務大臣賞の地域創造大賞を受賞。来館者 500 万人。 ○平成29年7月　来館者 600 万人達成。
感想（まとめ） 本市へ生かせること 等	著名人から「ミュージアムそのものが芸術作品になっている」、「八戸市民が八戸を再認識でき、八戸市民ではない人が八戸を知ることもできるようになっている」、「今後の文化政策において、文化だけを考えるのではなく、文化と観光、あるいはまちづくりとの融合が必要であるが八戸の「はっち」がその施設である」と高く評価されており、毎年来館者が100万人増加し、目の前の通りの歩行者数が如実に増加している事実には感嘆する。施設自体の採算が取れていなくても周辺にそれ以上の経済効果を出すという費用対効果を徹底的に考えており、新しい行政の施設運営として手本となるものであった。本市もこれまでの慣習にとらわれずに新しい目線での施設建設・運営をもっと真摯に考えなくてはいけないと考える。また、歳入・歳出の面だけではない、市民の満足度や周辺経済効果などでの施設評価も必要だと考えさせられた。